

温故知新

幸せな日々を、このまちで

戦後の高度経済成長は、

日本を世界の先進国へと押し上げました。

パソコン一つとっても、

現行モデルを使いこなす前に新型が登場するなど、

猛烈なスピードでハイテク化が進んでいます。

そんな社会の中で、

不変のスキルとして継承される高齢者の知恵や技は、

単純かつシンプル。

理由は簡単です。

ハイテク化は、贅沢をするための知恵。

一方、高齢者のスキルは、

生きるために生み出された知恵だからです。

団塊世代が高齢者となる時代はそこまで来ています。

長寿大国ニッポンの未来が幸か不幸か決定付けるものは

家庭や地域など一番小さなコミュニティー。

これから迎える高齢社会。

誰もが安心して老いていける松前町を築くためには

どうすればいいのでしょうか。



「戦中など、食べ物が満足になかった時代は、サツマイモやカボチャの葉柄（葉身を茎や枝につないでいる細い柄の部分）も大事にいただきました」と話す池内喜久美さん＝東古泉＝（88歳）。夏から秋の青野菜が不足する時期に食べられるサツマイモの葉柄は、今でも喜久美さん宅の食卓を彩っています。

100歳以上が32人もいる松前町。長寿は町の誇りです。だからみんなで祝います。だからみんなで支えます。町中にあふれる「愛情」と「人情」が長寿の「土壌」をつくっています。



みんなに祝福されながら、町長からお祝い状を受け取る山本ツギさん。



家族に囲まれ幸せいっぱいの山田タ子ヨさん。

100歳5万人時代 世界一の長寿大国ニッポン

2011年の100歳以上の高齢者数は47,756人（前年比+3,307人）で、本年度中に100歳に到達する人は、9月1日現在で24,952人（前年度比+1,683人）。100歳以上の高齢者は、年々増えている。老人福祉法が制定された63年には全国で153人だったが、81年に1千人、98年に1万人を超え、09年に4万人を突破した。百歳以上の高齢者のうち女性は41,594人で約87%を占める。人口10万人当たりの100歳以上は全国平均で37.29人。昨年行われた国勢調査の抽出速報では、高齢化率（総人口に占める65歳以上の割合）は、イタリアを上回る23.1%で、世界一の長寿大国になった。
※住民基本台帳による都道府県等からの報告数

9

月の敬老の日に合わせて、白石勝也町長と早瀬武臣議長は9月1日と2日、町内の100歳以上のお年寄りの自宅などを訪問して、記念品とお祝い状を贈りました。

本町の最高齢者は明治37年生まれの内イワノさん。恵久美の107歳。イワノさんを含め100歳以上の長寿者は32人です。本年度は、12人の皆さんが新たに100歳を迎えます。

白石町長は「100歳を超える長寿を保たれていまずことは松前町民の誇りです。これからもお元気で長生きしてください」と、一人一人に励ましの言葉を掛けながら、長寿を祝いました。今年100歳を迎える山本ツギさん、鶴吉は、鶴寿



101歳の太西トノさん。貴さんの「母さん、おめでとう」の声ににっこり

荘に入所しています。お祝いに駆けつけると、ツギさんを祝福するため施設の皆さんが集まっていました。入居者、職員や家族など、大勢の皆さんが温かく見守る中、白石町長からお祝い状と記念品が贈られました。

山田タ子ヨさん、南黒田も今年で100歳。老健施設「伊予ヶ丘」に入所中のタ子ヨさんは、歌や踊りが大好き。長寿者訪問の日は、歌が大好きな長男の富繁さん、踊りが大好きな嫁の貞子さんらに囲まれ、幸せいっ

ぱいの表情を浮かべるタ子ヨさん。富繁さんの歌と貞子さんの踊りに合わせて、元気な踊りを披露し、みんなを心ゆくまで楽しませてくれました。

今年で102歳の永井ヒサエさん、徳丸。子の嫁邦子さんと自宅で暮らしています。「幸せです。ありがとうございます」と邦子さんに感謝し、邦子さんもまた「こちらこそ元気でいてくれてありがとう」と感謝します。

自宅で、病院で、施設でと、祝いの席は違っても、どの場所にも、長寿者の皆さん、家族、施設の皆さんの幸せいっぱいの表情と温かい愛情があふれていました。

愛情と人情は、松前の土壌です。土壌がいいと人情や愛情は連鎖します。その連鎖が、住むと幸せになれる松前をつくりあげています。

松

前にある「人情」は無形の文化です。肌になじみ、心に染みる、すーっと浸透するナチュラル感はとても心地よいものです。

新たに移り住んできた人たちさえも、昔からここに住んでいるかのように溶け込んでいくのです。ここにあるのは、さんさんと降り注ぐ「愛情」とじわじわと染み渡ってくる「人情」。そんな肥沃な「土壌」が良質で温かいコミュニティを生み出しています。

「困ったらいつでも言うて」と声を掛けるお隣のおばさん。「御飯食べてお帰り」と引き留める同級生のお母さん。「ナス、よかつたら持って帰り」と山盛りくれる農家のおじいちゃん。「〇ちゃん、元氣？ 就職決まったんやてね」と一緒に喜ぶ地域のおばあちゃん。「お父さん、具合いなか？ いるものある？」と気にかけてくれる組内のご主人など、身内のようによくしてくれる近所さんがたくさんいます。

居心地がいいのは、利便性だけではなく、むしろ町民性こそが松前の魅力です。だからみんなが長寿を祝うのです。みんなが介護や子育てを協力するのです。

池内イワノさん

107歳 Ikeuchi Iwano



靖さんと恭子さんと一緒に雑誌を読みながらお話を楽しむイワノさん。

●プロフィール

明治37年生まれ。孫8人、ひ孫15人に恵まれ、明治・大正・昭和・平成と、この町で人生を送ってきました。師範学校を卒業後、教員の座につき、退職後は婦人部役員として活躍。恵久美在住、107歳。

「お袋は知識と知恵の宝庫。自立心が強くて我慢強い。見習いたい」と靖さん。人とお話をするのが一番の幸せと話すイワノさん。靖さんと恭子さんに囲まれ、今日も幸せ時間を過ごします。

知 長い年月で培う

（知識と知恵の宝庫）

経 済ではなく「暮らしをつくる」ことが目的だった時代、人は生きるため知恵を絞りました。その知恵や技は、家庭の中で、日常の暮らしの中で継承されました。コミュニティの中心は家であり地域であり、そこには「祖父母」がいました。大事なことは祖父母から学んでいたのです。

明 治37年生まれ、107歳の池内イワノさん。町を奪っていききました。どんなに文明が発達しても、どんなに科学が進歩しても、祖父母が持つ経験は伝えられませんか。匠や熟練者と呼ばれる人の多くが高齢者であるように、祖父母の知識や技術も長い年月を重ねて培われたものだからです。知識や技術は、伝えてこそ意義があり、つないでこそ価値があるのです。

内一の健康長寿者です。伊予市生まれイワノさんは、40歳の時、松前町にお嫁入り。教師をしながら4人の子どもを育て、退職してからは農協の婦人部活動に精を出し、全国の副会長も務めるほど活躍しました。

現在は三男靖さんと嫁恭子さんと一緒に暮らすイワノさんは、耳が遠いほかは、健康状態も良好。気配りを忘れず、おしゃれで、筆まめな素敵な女性です。多い時は700通もの年賀状を手書きしていました。その

どんなに文明が発達しても、科学が進歩しても、伝えられないことがあります。それが高齢者が持つ「経験」です。

故 幸せに100歳を迎える

（故郷松前町の魅力）

松前町の美しうのどかな田園風景はおおらかさを、きれいで豊かな水は健やかさを、恵みをもたらす海は朗らかさをもたらしてくれま

い つもの「西古泉の喫茶店 カフェトレイン」に響く声の主は、10月にめでたく100歳の誕生日を迎える大内増男さん。恵久美。コーヒー好きで「喫茶店でお茶する時間が至福の時」と話す大の喫茶店好きでもあります。マスターは「初めて来てくれた時が90代。しかも毎日マウンテンバイクに乗ってきてくれました」と話します。6年前、足の大腿骨を骨折してからもタク

シーで通い、今でも月に数回は家族と一緒に通っています。お気に入りには店員さんとお話することができるカウンター。「近くに座った人とお話するのも楽しい」と増男さん。「100歳には見えないお元氣な姿に、みんな声を掛けずにはられないみたいで。大内さんも、しっかりと口調で答えるから、お友達がいっぱいいます」とマスターはにつこり。ここでお茶して、帰りは仲良くなったお

客さんに送ってもらうことも多かったといいます。「松前の人は、みんな明るく優しい。お互いに言いおうて、親しくなったら送ってくれた。ありがたい」と感謝します。「松前は漁師町だから、町の人は物事にこだわらない楽天家が多いな。くよくよせんことが長生きの秘けつじや。松前が好きじや。ずっとここがええ」

松前町には、ずっと変わらない増男さんの笑顔があります。

2/4

特別なことはないけれど、当たり前のことが当たり前に満たされる松前町。だからずっと住み続けたいくなります。

100

歳以上の人が32人いる松前町。これを全国と比較するとどうでしょう。全国の100歳以上の人の割合を人口10万人当たりに換算すると37・29人（9月15日現在厚生労働省発表）。同様に松前町で換算すると、なんと102・21人です。このまちで、こんなにもたくさんの方が100歳を迎えられた理由は、何でしょう。

●プロフィール

明治44年生まれ。長年、東レ愛媛工場に勤め、松前で住み、働いてきました。退職後は、趣味の旅行とサツキを楽しみました。現在の趣味は喫茶店でお茶をすること。息子家族と5人暮らし。恵久美在住、100歳



大内増男さん

100歳 Ouchi Masuo

カフェトレインで至福の時を過ごす増男さん。

INTERVIEW



茂川 桂さん
学習アドバイザー 北川原

子どもたちと教え合い

紙ひこうきの作り方には自信があるんだけど、子どもが想像を超えた折り方で新型の紙ひこうきを作ることがあって感動します。子どもと教え合って、新しい発見をすることが楽しいです。



田島 みのりちゃん
岡田小学校2年・恵久美

何でも知っててすごい

今日の紙ひこうきも、前のこま回しも、遊び方のコツを教えてくださいました。おじいちゃんおばあちゃんは何でも知っててすごいと思います。いろんなことを教えてもらいたいです。



澤田 颯くん
岡田小学校2年・恵久美

もっとたくさん話したい

アドバイザーさんが初めての遊びをいろいろ教えてくれるので楽しいです。いろんな話も聞かせてくれるし、僕の話も聞いてくれるのでうれしいです。もっといろいろな話をしたいです。



新 | 今ある資源を生かしてつくる ^{4/4} 《過去と現在の融合の先に 見える未来》

高齢者は、長年にわたって社会に貢献してくれたかけがえのない存在。
若い世代は、その精神を受け継ぎ未来に伝えていく大切な存在。
未来は、過去と現在の融合の先にあります。

ですが、祝日として制定された経緯には「お年寄りの知恵を借りてまちづくりをしたい」という思いがありました。この思いを受け継ぐように、高齢者の貴重な経験や知識を生かしてよりよい社会づくりをしようという取り組みが増えていきました。例えば、多くの市町村が老人クラブやサークル活動を推進。授業の一環として高齢者に技を教わる学校もあります。まさに高齢者の知識と経験は町の資源そのもの。こうした社会の動きは、よりよい社会づくりに貢献する機会を高齢者に提供するとともに、その生きがいにもつながっていきます。

高齢者は、長年にわたって社会に貢献し、伝統を今に受け継いでくれたかけがえのない存在。同様に若い世代は、その精神を受け継ぎ未来に伝えていく大切な存在。老いも若きも安心して老いていける豊かな松前町を築くためには、高齢者を家族の一人として尊重するだけでなく、「社会の中のかかけがえのない先輩」として敬い、その人生の知識と経験を次世代に生かし、新しい価値をつくる「温故知新」が欠かせません。

20 世紀の高度経済成長の時代には、開発が進みました。これからの21世紀は、今ある資源を組み合わせたり形を変えたりして新しい価値をつけていく時代です。

日本には「敬老の日」という祝日があります。敬老とは、文字通りお年寄りを敬うことで

児 童の放課後の居場所「放課後子ども教室」。写真は岡田校区の教室で紙ひこうきを作る植木大和くん（岡田小1年）と大西祐翔くん（同）を教える学習アドバイザーの茂川桂さん「北川原」。おじいちゃんと同世代の桂さんに子どもたちはすっかりなついていきます。教室では、桂さんのように知識と知恵、技や経験などのスキルが豊富な高齢者の皆さんが地域ボランティアとして子どもたちと交流しています。題材は紙ひこうき、羽子板、カーリングなどさまざま。桂さんら学習アドバイザーが計画します。「遊びに古い新しいはない。今の遊びは全部昔の遊びを元にしてできているんだから」と桂さん。